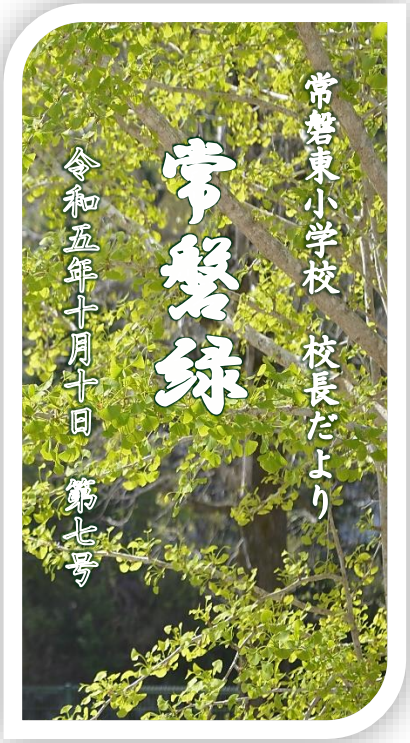

宣誓の眼（まなこ）に秋の空を見ゆ

打たれ強く、粘り強い子に育ってほしい。これは、本校が目指すひがしっ子、「ひ・が・し」の①「心身を鍛え、たくましく健康な子」に基づく、私の切なる願いである。

心身を鍛える場は、あらゆるところにある。九月末からの二週間、保健・給食委員会が「姿勢ばっちり週間」と銘打ち、良い姿勢を保つための意識高揚を図った。これも、自らを鍛える場の一つである。そして、強化週間後の今も日常的に取り組めていれば、来年の今頃は一歩成長した姿が見られることだろう。

子供は日々成長しているが、小さな変容は見落としがちである。その中にあって部活動という二年半にわたる取り組みは、周りからも子供自身にとっても成長を実感できる機会である。

十月四日、人工芝にタータン上の白線がまぶしい龍北スタジアムにて、岡崎市小学校陸上大会が開催された。市内十九校が参加する中、常磐東小は男子総合七位。個人の部では、男子走高跳で一ｍ

三十ｃｍを記録した今井奏太さんが優勝を果たした。男子走幅跳では本目來輝さんが五位、男子八十ｍハードル峰澤響斗さんと、女子千ｍ和出ひなたさんが六位、男子四百ｍリレーの峰澤・今井・黒柳・本目チームと女子走幅跳の石原茜音さんが七位入賞を果たす。

あの大舞台を前に、日頃の練習の成果やそれ以上の力を発揮するとは、大した度胸である。そして、出場した選手の誰もが、緊張を乗り越え、最後まで力強く競技に挑んだことに変わりはない。ここに、記録や順位として残る結果だけでは測れない、これまでの心の成長や、これからのさらなる成長の種がある。これは、選手だけのものではない。懸命に応援をした誰の心にも「種」は見つかるはずである。あとは、その種を育てるかどうかだ。

キッズデイズ中、小学校陸上大会の他に、私は市内小・中学校のバレーボール大会を観戦した。激戦の末、初戦で敗退するチームをいくつも見た。彼らの心にはどんな「種」が宿ったであろうか。くしくもワールドカップ男子バレーのパリ五輪予選では、日本チームが対エジプト戦に逆転負けした後で快進撃を繰り広げ、とうとうパリオリンピック出場の切符をつかんだ。日本男子バレーチームのキャプテン石川祐希選手は岡崎市出身で、小学生時代に本校の樹神先生からバレーの指南を受けた一人である。石川選手は小学生時代からどのように考え、実践し、このような世界に通用する一流の選手に上り詰めたのだろうか。

今日は、九月に上学年が観戦したサッカーチーム「ＦＣマルヤス岡崎」の選手によるキャリア教育の授業がある。スポーツを通して成長し続ける人の姿や言葉から、挫けない精神力を学んでほしい。